

# 被災地に夜間学校

東日本大震災で被災した宮城県女川町で、NPOや保護者、町教育委員会など地域が一体となって運営する「夜間学校」が4日夕、

も検討、「地域全体で子ども

を育てる場にした」と主催のNPOは話している。

「女川向学館」と名付けられたこの「学校」は、避難所となっている町立小学校を使う。地元の小中高校生を対象に週7日、夜に1日3コマを設け、数・英など5科目を教える。震災で働く場を失った地元の塾講師を雇う。

保護者や地域住民たちにも、読み聞かせや自習の監督などの形で運営に参加してもらおう予定。キャリア教育の授業の講師として仕事や人生観を語ってもらうことも考えているという。

運営費は企業などの寄付で賄い、受講料は少なくとも3カ月程度は無料。6月末までに子どもたち177人から応募があった。

震災で、女川町では11あった学習塾が1に激減。力を入れてきたキャリア教育も停止していた。

そんな中、高校生向けのキャリア教育を手がけてきたNPO「カタリバ」（東京）の今村久美代表理事



保護者向けの事前の説明会には大勢が参加した。宮城県女川町、川見龍人

（31）が、この夜間学校を提案した。放課後の学習の場がない子どもたちと職場を失った塾講師の両方を支援し、学習とキャリア教育も両立する発想。町教委も小学校の提供を決めた。

（川見龍人）

開校を前に3日に同町を訪れた鈴木寛・文科科学副大臣は「新しい教育や公共、街づくりのモデルと言える」と期待を示した。今村さんは「教育を人任せにせず、みんながかかわる場